

『深夜のラジオ』

作 四方田直樹

登場人物

相馬繭子（16） そうままゆこ 高校生 — 繭子
相馬早苗（18） そうまさなえ 高校生 — 早苗
相馬孝三郎（45） そうまこうざぶろう — 孝三郎 鉄道保線員

昭和五〇年代後半（1980年代前半）。秋。

茨城県を超えて福島県に入ったあたりにある相馬家の居間。

上手奥に二階の寢室に向かう階段。

深夜。

椅子に座りテーブルに向かう相馬繭子。

家族が寝静まった頃、こつそりとラジオDJの真似事をしている。

テーブルにあるラジカセは録音ボタンが押され、中のカセットテープがゆつくりと動いている。

他に牛乳パックで工作したカフボックスを模したスイッチ。

ピンポン球に棒をくりつけたマイクのつもりの何か。

足元にこれらのものをしまっていた段ボール。

目覚まし時計。針は深夜3時を示している。

今日も自作自演のラジオ放送が始まっている。

繭子 「午前3時をまわりました。学校や職場を捨てて冒険に出たい。でも迷

惑はかけたくない。わかるよ。そんな仲間達のひとときの旅の時間。相馬繭子のミッドナイトトラベル。改めまして旅の仲間、パイロットボードの相馬繭子です。みんなまだ起きてる？明日の体育の時間の体力を心配しているようなヤツは……もうとつくに夢の中かな？3時台は地図を信じられない迷い子たちのお悩み相談の時間。今週も全国の日常を捨てられない旅人のみんなからおハガキ来てます。まずは一人目の迷える旅人さんは……」

繭子、ハガキを取り出し（自分で書いた自作自演の文面）を読む。

繭子 「東京都府中市のペンネーム、少女E子さん。このペンネームは明葉

ちゃん派かな？いいよね中森明葉。明葉ちゃん、聞いてたらゲストに来てほしいな」

この辺りから、階段の上部あたりからそつと相馬早苗が居間の様子を窺って

くる。

繭子は早苗に気が付かず。DJになりきって進行を続けている。

繭子 (ハガキの内容) 繭子さんこんばんは。こんばんは。毎週、楽しみに聞

いています。ありがとうございます。ミッドナイトトラベルだけが私の心の拠り所です。どうして毎日放送してくれないのでしょうか？そうすれば心おだやかに過ごせる時間も増えるだろうに。どうした？どうした。深刻だね。えっと。私の悩みと言うのはズバリ恋の悩みです。私は同じクラスのある男子に片思いをしています。彼はそんなに目立つタイプではなく、休み時間は机に突っ伏して寝ているような人なのですが、運動部の男子とも仲が良く、彼らも一目置いている感じなのです。女子とはあまり話していいところは見たことがありません。ちょっと舌占手意識があるのかも？そんな彼を私がどうして好きになつてしまったかというところ、ある放課後、彼が一人音楽室でピアノを弾いているところを目撃してしまつたからです。そして、とても面白い！びつくりマーク。ピアノが弾けるなんて一言も言つていなかったのですがとても驚いてただ彼のピアノの音色を聴き続けていました。それ以来、彼のことが気になつてしまい。元々手についていなかった勉強もますます手につかなくなります。これはもう当たつて碎けるダメで元々。告白して玉碎してしまつた方がいいのではないかと思います。繭子さん、私はどうしたらいいでしょうか？地図を持たない迷子の旅人に道標をよろしくお願いします」

繭子、ハガキから顔をあげて

繭子 「少女Eさん。切実な恋の悩み、打ち明けてくれてありがとうございます。片思い。

辛いよね。私もさ、経験あるからさ。わかるよ。そんな私の経験だとダメで元々の告白はあんまりお勧めしないかな。まずは共通の話題で距離を縮めると言うのはどうかかな？少女Eさんのペンネーム、そして私の深夜ラジオを聞いているディープさから察するにかなりの音楽好きだよね？まずは少女Eさんが音楽好きだつて知つてもらつるところから始めてみるのはどう？いつも眠たそうになっているなら深夜のラジオのヘビリスナーかも？ハガキを読まれたリスナーに送る番組タイトルステッカーを鞆につけて登校してみるとか？いいんじゃない？これ？次の展開あつたらまたおハガキください。報告待つてるよ！では曲に行つてみましょう。中森明菜でセカンド・ラブ」

繭子、牛乳パックのカフボックスのスイッチを下げる。

階段上部から早苗がトントントンと軽妙な足取りで降りてくる。

早苗 「何やつてるの？」

突然の姉の登場に驚く繭子。ラジカセの録音ボタンを咄嗟に停止する。

繭子 「げがつ」

早苗 「ねえ？」

繭子 「これは、その」

早苗 「これ何？」

早苗 牛乳パックのカフボックスを手で掴み観察する？

早苗 「スイッチ？あ、牛乳パックだ。牛乳パックで作ったの？これ？」

繭子 「……」

早苗 「これ何？あ、動く」

繭子 「あ、うん。スイッチのつもり……」

早苗 「スイッチ？何の？」

繭子 「……」

早苗 「ねえ？何の？」

繭子 「わかんないけどラジオの収録写真に写ってるスイッチ。多分、マイクの音を聞こえなくするんじゃないかな」

早苗 「これでマイクの音切れるの？」

繭子 「多分」

早苗 「牛乳パックなの？」

繭子 「これは無理、牛乳パックだから」

早苗 「じゃ何これ？」

繭子 「それはちよつと（モゴモゴと）ラジオブースの雰囲気のためというか……」

早苗、マイクに見立てたマイクのつもりの何かを手にとる。

早苗 「これも作ったんだ？これはマイク？（マイクラしき部分に顔を近づけて）あーあー」

当然、マイクラしきものから反応はない。

早苗 「これも音しないね」

繭子 「そりゃそうだよ」

早苗 「相馬繭子のミッドナイトトラベルって何？」

繭子 「……」

早苗 「あんたのラジオ番組？」

繭子、顔を背ける。

繭子 「……」

早苗 「繭子さんこんばんは。毎週、楽しみに聞いています。ミッドナイトト
ラベルだけが私の心の拠り所です……」

繭子、早苗からハガキを奪い返す。

繭子 「やめてよ」

早苗 「誰も聞いてないんだよね？え？じゃ、このハガキもあんたが書いた
の？(笑)自分で？ハガキびつちり？」

繭子 「……」

早苗、堪えきれなくなり大笑いする。

早苗 「アハハハハ……！」

繭子 「しー！しー！お母さん起きちゃうよ！」

早苗 「(笑) えー？」

早苗、笑を押し殺しながら階段を登ってゆく。

繭子、段ボールに工作物や時計、ハガキ、台本などを急ぎしまつてゆく。
すぐに早苗が階段を降りてくる。まだ笑っている。

早苗 「(笑) いびきかいて寝てる(笑) 何？あんたラジオの人になりたいの？」

繭子 「そんなんじゃない」

早苗 「(笑) なりたいたいからラジオ……っこしてるんじゃない？」

繭子 「それとこれとは別」

早苗 「(笑) わかんない」

繭子 「もういいじゃない」

早苗 「ラジオのああいう人つて他でも有名じゃないとなれないんじゃない
の？(ビート) たけしとかイルカとか中島みゆきとかさ」

繭子 「そうじゃない人も居るよ」

早苗 「たとえば？」

繭子 「吉田照美さんとか？」

早苗 「知らない」

繭子 「お姉ちゃんもつと聞いたほうがいいよラジオ」

早苗 「ザーザー言つて聞いてらんない。あんたよく聞けるよね」

繭子 「興味ないならほつといてよ」

早苗 「録音してたんでしょ？見込みあるかどうか聞いてあげる」

早苗、ラジカセの再生ボタンを押す。

繭子がそれを止める。

繭子 「やめてよ」

早苗 「聞かせられないの？」

繭子 「お姉ちゃんにはだめ」

早苗 「誰になら聞かせられるの？あ、2組の岡田？さっきのピアノ弾いてる

男つて岡田のことでしょう？あんた岡田のこと好きなの？見る目ないなくあいつはタラシだよ」

繭子 「……」

繭子、涙目。

繭子 「誰かに聞かせたくて、録ったんじゃないから……」

早苗 「ラジオつて誰かが聞くもんじゃない？誰も聞かないラジオの人なんて意味ないじゃん？だから私が聞いてあげらつて」

早苗、ラジカセの再生ボタンを押す。

繭子、停止ボタンを押す。

数上の押し問答のような繰り返し。

早苗 「聞かせろ」

繭子 「だめ」

早苗 「判断してやるから」

繭子 「お姉ちゃんにはわからない」

早苗 「誰でも聞けなかつたらダメなんじゃないの？」

繭子 「今じゃない」

早苗 「いいでしょ？」

繭子 「ああ！」

繭子、ラジカセからカセットテープを取り出し、テープを引つ張り出し、しゃぐしゃにする。

早苗 「あーあー」

繭子 「お姉ちゃんのバカ！ブス！」

早苗 「何？」

早苗、繭子に掴みかかる。
深夜に取っ組み合いの姉妹喧嘩。

そこへ、仕事を終えた父、相馬孝三郎が帰宅する。

孝三郎、作業着姿ではあるが職場の風呂で汗を流してきている。

孝三郎、二人の間に入り、争いを止める

孝三郎 「何やってんだオメェら」

繭子 「お姉ちゃんが」

孝三郎 「早苗！」

早苗 「繭子がこんな夜中にラジオごっこなんかしてるのがいけないんじゃない
と」

繭子 「いいじゃない！迷惑かけてないでしょ？」

早苗 「目が覚めちゃったじゃない」

孝三郎 「何だあ？」

繭子 「ほつといてくれればよかつたのに！」

早苗 「気になつちやうよこんなの」

孝三郎、二人を制するように低い声で

孝三郎 「ウツセーぞお前ら」

早苗と繭子、言い合いを止める。

孝三郎 「外に放ん投げつぞ」

繭子 「……」

早苗 「私はただね」

孝三郎 「父ちゃん仕事から帰ってきて先に言うことはねえか？」

繭子 「お父さんお帰りなさい」

早苗 「お帰りなさい」

孝三郎 「はい。ただいま。やー今日もくたびれた」

孝三郎、椅子に座る。

孝三郎 「やれやれって帰って見たらお前ら、何だよ。こんな時間に何してん
だよ」

早苗も椅子に座る。

早苗 「繭子がラジオごっこしてたのこんな時間に」

繭子が早苗を睨む。

孝三郎 「ラジオごっこ？なんだラジオごっこって？箱みたいに四角くうずくまる遊びか？」

早苗 「そうじゃなくてラジオの中の人の真似」

孝三郎 「ラジオの中の人？お前、来年から働きに行くんだろ？まだラジオに人が入ってると思ってるのか？あれは機械で電波を受信して音出してんだぞ？中開けても人はいねえよ？」

早苗 「知ってるよ。それくらい。そうじゃなくて、ラジオの中の人！」

孝三郎 「はあ？わかるように喋れよ」

早苗 「何でわかんないの？ほらなんて言うの繭子、説明しな」

繭子 「やだ」

早苗 「はあ？」

繭子 「やだ」

早苗 「いいの？お父さんに伝わらなくて。説明しなさいよ中の人っていうのは、放送のことで」

早苗、孝三郎を見て

早苗 「放送。ラジオ放送のごっこ」

孝三郎 「ほうそう？」

早苗 「アナウンサーがニュース読んでたりする」

孝三郎 「ああ、放送かラジオ放送ね。俺はてつきりバナナでも包んでる紙のことかと思っただぞ」

早苗 「そつちの包装じゃなくて、ともかく、ラジオ放送のごっこ。真似事してたの」

孝三郎 「お前がか早苗？」

早苗 「私じゃなくて繭子が」

孝三郎 「繭子。そうなのか？」

繭子 「……」

孝三郎 「黙ってちゃわかんねえっぺ？何でラジオの放送？真似事なんかしてたんけ？」

繭子 「……」

早苗 「言いなよ」

孝三郎 「早苗、こら」

孝三郎、繭子を手招き

孝三郎 「お前もこつち座れ」

繭子、しずしずと椅子に座る。

繭子、黙秘を続けている。

孝三郎 「喋るたくねえか？」

繭子 「……」

孝三郎 「早苗、ちよつとよ喉が渴いたな。冷えてるだろう？ちよつと開けてきてくれよう。」

早苗 「お母さんから夜勤明けは飲まないように言われてない？」

孝三郎 「今日はこんだからな。な、よかつべ？」

早苗 「私もお腹すいた」

孝三郎 「はあ？飯なんか残つてねえつべ？」

早苗 「カップラーメンならあるよ。ポットにお湯も」

孝三郎 「相変わらず抜け目ねーガキだなオメーはよう」

早苗 「いいでしょ？」

孝三郎 「繭子の分もあるよな？」

繭子、孝三郎を見る。

孝三郎 「お前も食うだろ？」

繭子 「いいの？」

孝三郎 「食うんだな？」

繭子、頷く。

孝三郎 「(早苗に) そしたら早く持つてこい」

早苗 「やった〜」

早苗、台所に去る。

孝三郎、胸のポケットからタバコを取り出すもパッケージだけで中身がない。

孝三郎 「そうだ。切らしてたんだ。買い置きしとくんだった」

繭子 「買ってこようか自販機？」

孝三郎 「あ？……いいよ。こんな夜中に娘が出歩くもんじゃねえ」

孝三郎 タバコのパッケージを丸めて、再び胸ポケットにしまう。

孝三郎 「アナウンサーの真似事してたのか？」

繭子 「……ディスクジョッキー」

孝三郎 「わかんねえよ横文字は」

繭子 「アナウンサーも横文字だよ」

孝三郎 「ああそうか」

二人、笑う。

孝三郎 「そういうもんになりテエのか？お前は？」

繭子 「……」

繭子、口に出してしまうと夢は叶わないのではとなんとなく考えており、言葉に乗せられない。

孝三郎 「ダメつてつと父ちゃんわかんねえぞ」

繭子 「……お父さんはさ、何かあるの？」

孝三郎 「何？」

繭子 「私ぐらいの時、なりたかったもの？」

孝三郎 「俺？」

孝三郎、思い出してみる。

繭子 「今の仕事？」

孝三郎 「は？」

繭子 「線路直す人？」

孝三郎 「保線員になりてえ高校生なんていねえつぺよ」

繭子 「じゃ何？」

孝三郎 「思い出せねえなあ。野球ばつかしてたから」

繭子 「プロ野球選手？」

孝三郎 「プロ野球選手か(笑) 考えたこともなかった。なりてえもんなんか

あつたかなう？」

早苗が、お盆に大瓶の瓶ビール、グラス、小鉢（塩辛？）カップラーメンを二つのせて戻ってくる。

早苗 「お待たせ」

孝三郎 「待ってました」

早苗、孝三郎の前にビールとグラス、そして、小鉢と箸を置く。

早苗 「はい、塩辛」

孝三郎 「お。こういう気はきくんだよな。お前はよ」

早苗 「へっへっへ」

孝三郎、手酌でビールをコップに注ぎ飲み始める。

孝三郎 「くく」

早苗、テーブルの中央付近にカップラーメンが乗ったお盆をおき、自分の分のカップラーメンと箸を手につつ、柱時計で時間を確認。

繭子もカップラーメンと箸を手元に置く。

早苗 「長い針が7指したら3分だから」

繭子 「うん」

繭子も時計を確認したことで、今が深い深夜であることを再確認する。

繭子 「すごいことしてる気がする」

早苗 「何が？」

繭子 「こんな夜にカップラーメンなんて」

早苗 「あんたのラジオごっこのおかげだわ」

繭子 「ごっこじゃない」

孝三郎 「食ったら寝ろよ」

早苗 「お父ちゃんさ、文化祭くる？」

孝三郎 「あー。いつだっけ？」

早苗 「再来週の日曜」

孝三郎 「いけっかな？」

早苗 「来てよ」
孝三郎 「オメエなにやんだ?」
早苗 「焼きそばとクレープのお店」
孝三郎 「模擬店か」
早苗 「私、ウエイトレスしてるから食べ来て」
孝三郎 「夜勤明けで起きられつかな」
早苗 「来てよ」
孝三郎 「母ちゃんに起こすようによく言っとく」
早苗 「私からも言っとく」
孝三郎 「繭子はなにやんだ?たこ焼き屋か?」
早苗 「一年が模擬店できるわけないじゃん」
孝三郎 「しらねえよそんなこと」
繭子 「合唱」
早苗 「つまんねー」
孝三郎 「何歌うんだ」
繭子 「たぶんお父さん知らないやつ」
孝三郎 「言ってみろって」
繭子 「……宇宙戦艦ヤマト」
孝三郎 「軍歌かなんかか?」
繭子 「ほら」
孝三郎 「違うんけ?」
早苗 「マンガの歌。高校生なのにさ」
繭子 「私が決めたんじゃないよ。担任が決めたの」
孝三郎 「田中先生だっけか?」
繭子 「佐久間先生」
早苗 「全然違う」
孝三郎 「田中先生は早苗のクラスか」
早苗 「違うようちはエンゼル」
孝三郎 「外国人か?」
早苗 「森永だからエンゼル」
孝三郎 「わかんね」
繭子 「エンゼルマークだから」
孝三郎 「そうか。わかんねえけど」
早苗 「だから、」
孝三郎 「どっから出たんだ田中先生って。アハハハ」

早苗、柱時計を見てすでに3分すぎている。

早苗 「あ！バカ繭子」

繭子 「え？」

早苗 「7過ぎてる。3分経ってる。伸びちゃう。見とけて言ったじゃない」

早苗、急いでカップラーメンの蓋をとる。

繭子 「言われてない」

早苗、ラーメンをすすりつつ

早苗 「言った。アチい！」

孝三郎 「バカだなオメエはよ。口は一個しかねえんだからよ。食うかしやべるかどつちかにしろ」

早苗 「食う」

繭子もカップラーメンを食べ始める。フーフーと麺を冷ましながら静かに口に入れる。

シチュエーションも含めてとても美味しく感じる。満面の笑みを浮かべる。

繭子 「美味しい」

孝三郎 「そんなかい？」

繭子 「うん。スキー行ったじゃない前？あん時も夜食べたよね。ドライブインの自販機のカップラーメン」

孝三郎 「猪苗代行った時か？」

繭子 「うん」

孝三郎 「そんなことあったか？」

早苗 「(ラーメンを口に入れながら) 食ははよ。すげーふまはった(うまかった)」
孝三郎 「食うかしやべるかにしろってよう。オメエは」

孝三郎がビールを飲み、早苗と繭子がラーメンをすする。

ほんのわずかな、静かな時間。

孝三郎 「文化祭、繭子の歌も聞けつといいけどな」

繭子 「いいよどっちでもみんなで歌ってるからわかかんないよ」

孝三郎 「体育館の段の上にいるんだからわかっぺよ」

繭子 「そうだけど」

繭子、ラーメンをすすする。

孝三郎、ビールを飲もうとして、不意にアントン・チェーホフ「かもめ」のトレープレフのセリフを口ずさむ。

孝三郎 「君は自分の道を発見して、ちゃんと行く先を知っている。だが僕は相変わらず、妄想と幻影の混沌のなかをふらついて、一体それが誰に、なんのために必要なのかわからずにいる。僕は信念がもてず、何が自分の使命かということも、知らずにいるのだ」

繭子、父が突然、芝居じみたセリフを発したことに驚く。

孝三郎、気にもせずビールを飲む。

早苗 「何それ？」

孝三郎 「わかんね」

早苗 「え〜？」

孝三郎 「なんか急に出了」

早苗 「え？イタコ？」

孝三郎 「バカだな。覚えたんだこれ。急に思い出したんだ。おめえらしくないのころよ。中学3年生だか。担任の黒ブーちゅうのが演劇かぶれだよ」

早苗 「黒ぶう？」

孝三郎 「黒部って名前の国語の先コーなんだけどな」

孝三郎、自分の鼻頭を中指で押し上げながら

孝三郎 「鼻が上向いててよ。みんな黒ブー黒ブーって呼んでよ。これがまたいつも鼻が詰まってふがふが言ってるよ。」

早苗 「キャハハ」

孝三郎 「文化祭だか学芸会かなんかですよ？なんかどつか外国の劇やるぞ、とか言い出してよ。誰もなんもわかんねえ難しいやつですよ。「黒ブーヨウやるのも見るのも誰もわかんねえよ」って俺らがブーブー言っただよ。こんときばかりは」

早苗 「キャハハ」

孝三郎 「黒ブーがよう。わかんなくていいんだ。やるぞとか言ってるよ。いいわけねえよなあ。そしたら、相馬、おめえも出るとか言い出してよ。出たんよ。主役だぞ」

早苗 「なんで？」

孝三郎 「わかんね。俺がいい男だったからじゃねえか？」

早苗 「え〜？」

孝三郎 「へっへっへ」

繭子 「なんてお話？」

孝三郎 「なんだったかな？忘れち……いや、なんか国鉄の特急みてえな名前
の話だったな……ひばりだかツバメだかかもめだか……かもめだったかなあ。こんなん覚えてる
ぞ」

孝三郎 かもめのニーナのセリフを暗唱する

孝三郎 「人も、ライオンも、鷲も、雷鳥も、角を生はやした鹿も、鷲鳥（が

ちょう）も、蜘蛛も、水に棲すむ無言の魚も、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかった微生物
も、——つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環（めぐり）をおえて、消え
失うせた。……もう、何千世紀というもの、地球は一つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だ
けが、むなしく灯火（あかり）をともしている。今は牧場に、寝ざめの鶴の啼（なく）音（ね）
も絶えた。菩提樹（ぼだいじゆ）の林に、こがね虫の音すれもない」

早苗 「意味わかんない」

孝三郎 「俺も」

早苗 「えー（笑）」

孝三郎 「俺のセリフじゃねんだ。相手役のヨシコが全然、全然覚えてらんなく

てよ。「相馬くん次のセリフなんだっけ？」とか言うからよ。本番も俺がこっそり教えたんだ。俺
はなんか覚えが早かったからよ」

早苗 「暗記は私も得意」

孝三郎 「血い継いだかな」

繭子、孝三郎の発した「かもめ」の一節に何かしらの勇気を得る。それは、
作品やセリフの内容ではなく、父から不意に感じた自分が目指したい道の光景、共感からである。

繭子 「私、ラジオのディスクジョッキーになりたい」

早苗と孝三郎が繭子を見る。

早苗 「何急に？（笑）別になりたいとかじゃないって言ってなかった？」

繭子 「やっぱりなりたかった」

早苗 「はあ？（笑）なれるわけじゃないじゃん」

繭子 「でもなりたい」

早苗 「なりたいでなれるならみんななってるって。芸能人じゃなきゃラジオ
の人にはなれないんじゃないの？」

繭子 「アナウンサーからディスクジョッキーになる人もいるよ。だから、私、

まずアナウンサーになりたい」

早苗 「(笑) アナウンサー？まずアナウンサーつて。知らない人と話もできないあんたが？アナウンサー(笑) 放送部でもないのに」

繭子 「入る。放送部」

早苗 「無理無理。あそこは体育会系より体育会系だからね。朝練あるし」

繭子 「お姉ちゃんのバーカ」

早苗 「何？」

早苗が立ち上がり、繭子につかみかかろうとする。

繭子、引かずに応戦の構え。

孝三郎 「やめろ。憶えねえガキどもだなあ」

早苗 「……」

繭子 「……」

二人、距離を取り(早苗、イスに座り直し)カップラーメンをすすする。

孝三郎 「アナウンサーつてのはどうやってなんだ？」

繭子 「専門学校もあるみたいだけど……大学出身の人が多いかな」

早苗 「大学？あんたが？大学？」

繭子、早苗を睨む。

孝三郎 「それじゃオメエうんと勉強しねえとだな」

繭子 「いいの？」

孝三郎 「勉強してくれんならありがてえよ」

繭子 「うん。やる」

早苗 「すぐさぼる方に100万円」

繭子 「さぼんない」

孝三郎 「繭子が大学いくんじゃもう一踏ん張りしねえとな(笑) あく運転手だったな」

早苗 「何？」

孝三郎 「父ちゃんがおめえらの頃、もっとガキの頃か。何になりたかったか

思い出した。俺、機関車の運転手になりたかったなあ。こう釜に木炭くべてよ」

早苗 「古」

孝三郎 「みんな電車になっちまったから、なんなくてよかった」

繭子 「だから線路を直す人になつたの？」

孝三郎 「んーわかんね？どうだろな？ははは」

早苗、ラーメンも食べ終わり、大きなあくび。

早苗 「ふわあ〜」

孝三郎と繭子が早苗を見る。

早苗 「眠い」

孝三郎 「寝ろ」

孝三郎、ビールをコップに注ぐ。

繭子、ラーメンをすすする。

終わり

作中のアントン・チエーホフ「かもめ」のセリフはアントン・チエーホフ作・神西清訳「かもめ」より引用しました。

初演 劇団二畳公演

短編劇集『江古田駅をミナミンへ』

2023年10月27日(金)〜11月3日(金)

江古田／FOYER ekoda